ヒマラヤ

HIMALAYA

1977年4月号



日本ヒマラヤ協会——HAJ

HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

****** HAJ ヒマラヤ集会 のご案内 **

【東京集会】 18時30分~20時00分 場所 有楽町トラベル日本「ラクチョウビル | 5 F 会議室。有楽町駅下車、日劇前を渡り、映画 館の右の通りを入ったつき当りのビル。

4月8日 ガルワル・ヒマラヤ情報など チャンガバン登山のこと/ネパール人との 登山/話題提供,会田雅英氏 3月26日、4月22日は中止。5月以降当分の 間定例集会は休みます。開催する場合はその

【北海道定例集会】 18時頃から、会費・年 1,000 円偶数月の第1月曜日を予定。(奇数日の 第1月曜日は自由参加の世話人会を チロリアンハウス「ケルン」(地下)で開催)

都度ハガキか「ヒマラヤーで予告します。

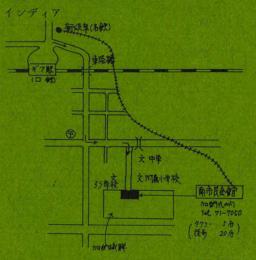
🕍 その都度、会費 1,000円をお納め下さった方に はハガキなどで連絡します。また、下記へお問い 合せ下さっても可。

集会場所

【中部地区定例集会】 18 時 30 分~20 時00 分 4月9日(土) ヒンズークシの旅

場所 岐阜市加納丸ノ内・岐阜南市民会館 (下図)なお、9日夜から10日(日)にかけて登 山をおこないます。問合せは HAJ名古屋事務所。

5月27日 ラダックの旅・ザスカールへの夢 場所 名古屋駅前毎日ビル7階747、エア・



ビスタリ・クラブの葉り(干告)。月4日(土)~5日 静岡県寸叉峡・詳細は「ヒマテヤ」3月号参照。

第7回東日本ヒマラヤ研究会(予告)6月25日(土)~26日--参加費8,000円(宿泊費・食費・会議費) 場所 秋田市・秋田労働福祉センター ◇前夜祭(映画会)6月24日(金)労働会館大ホール(300円) 日程 第1日目 10時開会、(午前)1976~1977のヒマラヤ/日本人とヒマラヤ (予定) (午後)探検とヒマラヤ、旅を求めて、蝶、氷河、など

(夜)パネル討議「ヒマラヤの可能性 | / 地域別情報交換会/ディナーパーティ 第2日目 バネル討議「遠征組識論」/H&Sプランの面白さ/シルクロードの山と人 申込先 〒010 秋田市広面字屋敷34-1 福田文二 申込金 2,000円をそえて5月25日までに。

「ヒマラヤー4月号目次 --- インド特集号

チャンガバン 1976 1 スリナガル 漫游記……… インドで感じたこと…………4 レスト・ハウス 新聞記事からの冒険………17 労山"海外登山集会"参加報告 8 ラダック その119 <H&Sのページ>インド通信(9)~(4)····· 9 * ラダック、ザスカールの 秘められたコース.....20 <関係の機関・団体──その5> ネール登山学校(インド)...... 15

∞∞∞∞∞ チャンガバン

1976 ************************

大 野 晴 美

チャンガバン(6,864m)は、1974年、クリス・ボニントンらにより、カランカとのコルより初登頂されている。我々は、彼らにより、"不可能"といわれた西面の南西岩稜より、全員登頂に成功した。前年の偵察山行により、南西岩稜一本に絞り、転進は考えなかった。

キャラパン

4月25日、ラタの村には、我々の隊も含めて3 隊の遠征隊が入っていた。インドのトリスル隊、 日印合同ナンダ・デヴィ隊であり、混乱状態にあ った。我々は、レニのポーターの話から、リシ・ ガンガにキャラバンルートをとった。シプトン、 ティルマンの時代に何度か失敗し、通過はできな いとされていた谷である。数カ所に橋をかけ、ペ ング、シャナバリ、ドドガンガ、そして4日目デ ィブルゲータに着いた。マラディオディで58人の ポーターを解雇、残る13人でベース・キャンプ(BC)への輸送を開始、5月2日、バギニに入り、 新しいポーターを加え、21人でBCへのピストン 輸送を続ける。8日にBC(4,800m)に集結する。 BCから上は雪の世界となり、再び8人の先鋭ポ -ターを残し、ABC(5,360m)への荷上げをおこ なう。5月16日すべての隊荷がABCに、集積さ れた。

南西岩稜

頂上より、一気にラマニ氷河に落ちているこの 岩稜は、岩と氷のすばらしいルートとなった。12日より、ABCへの荷上げと平行し、大野・小林により南西岩稜にその第一歩が印され、登攀の幕明けとなった。 $(5,580\,m)$ 地点より、固定ザイルを張り、9ピッチで C_1 地点に到着。連日午後からの降雨により、スラブ状のリッジは、傾斜のわりにはルートが延びない。17日、ボックステントを張り、 C_1 (5,870m)を建設。18日、戸田、小林、会田、大野により、 C_1 までのダブルボッカとした。さすがにきつく2回目は途中で戻る。19日、会田、大野は C_1 まで荷上げし、そのままルート開拓に向う。20日、21日とルート開拓、下では戸田、小林のダブルボッカがつづく。

22日、昨日の行動中、大野が軽い雪盲にやられ



B • C 附近より見たチャンガバン

休養。会田がABCまで連絡に降りる。トランシーバーは持参しておらず、むろん、シェルパも雇っていない。23日、調子の戻った狩野が、C₁にやってくる。戸田と代り、大野はABCに下る。4人でやっていたので、狩野の参加は心強い。24日、25日、戸田、会田によりルート開拓が進み、岩稜が壁に消える地点まで、ザイルが延び、いよいよ核心部の岩壁となる。

"カチン、カチン"の氷につきあたり、ピッケルが跳ね返ってくる。岩と氷のミックスした壁を登り、狭い岩棚の氷を削り、デポ地とする。

26日、(5,870 m) 地点の岩陰を整理し、ツエルトを張る。1人がどうにか座れ、もう1人は背をまるめ、苦しい姿勢となる狭いものである。ここをBP1と呼び、上部ルート開拓のための泊り場とした。

27日、BP1に泊った戸田、大野により、ルート開拓。ここは、10時にならないと陽がささず、寒い。アイゼンをはずし、もろい、浅い凹角より、

ハーケン連打で直上、戸田の妙技が続く。姿を消した戸田より、OKの声がかかり、ハーケンを回収しながら、ユマールで登る。今日の登攀に満足して下ると、もう16時であった。

28日、浅野もようやく荷上げに参加、全員がそろい一安心。今日は2ピッチ手直し、氷のバンドを40m 南壁側にトラバースする。ABCからは、すばらしい眺めであったという。すべて青氷のこの壁で、ここは唯一のテラスであった。しかし、幅は40cm程、ここに内側より、ビレーのとれる特製ツエルトを張り、BP2とする。29日、戸田・大野により、もろい凹角に2ピッチ、ルートを開き、早くはないが確実にザイルは延びる。30日、大野・小林・狩野により、BP2にツエルトが張られ、垂壁帯攻略の拠点となる。

31日より6月2日まで、ここより大野・小林によりルート開拓がおこなわれ、10ピッチ登った。ボルトを最小限におさえ、垂直の凹角をハーケンを使い登る。すばらしい登攀である。6,200mでの人工登攀も日本の山と全く同様に感じる。天気も安定し、日中は水音がしている。BP2の夜は楽しい。すべてのものは袋に入れ、ツエルト内のビレー用シュリンゲにつるし、自己ビレーをとり食事の用意。身動きはできず、食事が終ると、あらゆる努力の結果、どうにか横になる。眼がさめると、体は半分落ちかかり、夜間の降雪で雪だるまのようになっている。

3日、戸田、会田の2人は、ついにアイスキャップ(6,350m)に出た。ABCでは、大歓声でコールを送る。4日、ABCから一気にBP2への荷上げ。垂壁部分より、歩行の入る部分のユマーリングの方が、苦しいような気がする。

この日、戸田、会田の二人は、BP2より2個のザックと2個の荷上げ袋、計60kgあまりを持ち、アイスキャップに登り、氷壁に4ピッチのルート開拓をし、アイスキャップの頭、(6,480 m)にC2のテントを張るという、すばらしい行動をした。終了したのは、22時30分だったという。

5日、再びABCよりBP2への荷上げ、戸田、会田との連絡つかず心配する。天気は昨夜あたりから悪くなっていた。6日、浅野、狩野はBP1より登り、BP2の大野、小林と合流し、 C_2 への荷上げ。途中より風雪となり、ユマールがすべり、登れず下降。大野は風雪をつき C_2 に登り、ちょう

どテントに帰ってきた会田と無事を喜ぶ。

7日、8日と C₂への荷上げ。ルート開拓は、ジャンダルムの登攀にかかり、ボニントンの手紙に「通過は非常に困難・・・・・・・・」とあったそのリッジに、東壁上部の細いバンドをつかい、風雪の中、たくみにザイルを延ばす。すばらしい高度感。足下 1,200 m、スッパリとチャンガバン氷河に落ちている。下から見ても全くルートの予想もつかないリッジに、ジワリ、ジワリとルートを開いていく。

夏 登

9日に大野、10日に小林、11日に浅野、狩野がそれぞれ荷上げを終え、Cを入る。12日、戸田、大野により最後のルート工作が終了。上部ルートをトレースしていない浅野、狩野も、昨日の最高到達点までトレースし、登頂準備は完了した。固定ザイル66ピッチ、BCよりの高度差2,000mであった。13日、昨夜からの風雪で、すべるユマールをなめ、雪庇の出たナイフリッジをたどり、13時すぎ、視界のない頂上に全員で立った。

14日、風雪の中、ハーケン、ザイルを回収しながらABCに下降。ヒラリーカンとは、ザイルに付着した氷を落す道具かと、何度も思いつつ。無人のABCに下り、残り少ないウイスキーで酔い、若い、どちらかと言えば無名のチームが、不可能といわれた、この山の西壁の岩稜より、無事全員登頂できた喜びをわかちあった。

昨年の偵察時インドでたいへん力になっていただいた、HAJ会員の田辺郁夫氏、西郡光昭氏、HAJ 前事務所の家主、ケムチャン氏、そして今年のドウナギリ隊の加賀勝氏に、心より感謝いたします。

チャンガバン登攀隊 1976

<隊長> 戸田直樹(26)

<隊員> 小林 明(27) 会田雅英(26)(HAJ) 大野晴美(25)(HAJ) 浅野幸男(23) 狩野輝好(23)

会費納入のお願い――(ヒマラヤ講読料 4,000円)

52年(1977)の会費 4,000 円、名簿代 1,000 円計 5,000 円をご納入下さい。前納がたてまえとなっていますので早目にお願いします。

新名簿は 5月末頃に発行します。住所、勤務先 を変更された方は至急 HAJ名古屋事務所まで知ら せて下さい。



(上) アイスキャップから上部の ジャンダルムのリッジ

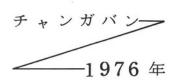
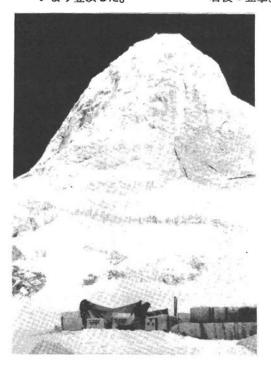


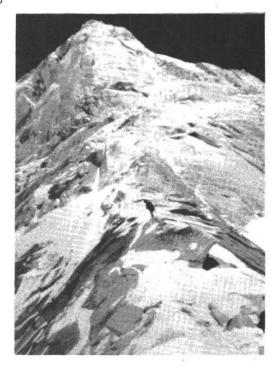
写真 • 大野晴美

アイス・キャップの登攀



- (左) A・B・Cよりチャン ガバンを見る。頂上は写 真の一番上のアイス・キャップのむこう側なので 写っていない。左のリッ ジより登頂した。
- (右) B•P-IよりB• B-IIへの 岩稜の登攀。





松 本 香代子

ネパールのビルガンジー からインドへ入る

バスがネパール国境の町ビルガンジーに着いたのは、日暮れがそう遠くない時刻だった。バスから降りたとたん、外国人である我々4人は、リキシャの車夫に二重三重にとり囲まれてしまった。

その日の朝、バスは2時間程遅れてカトマンズ 椿 を出発し、途中ダマン峠からのヒマラヤや一瞬、椿 のように見えた赤いシャクナゲの花々などを見つ つ南下し、ここビルガンジーに着いたのだった。 バスの座席は、まん中に通路をはさんで進行方向 を向いてすわるようになっていたが、一つの座 ウ 横幅は日本のそれと同じくらいなのに、ムチ 方止マクラみたいなでっぱりが3つあって、3人掛けだということを主張している。そんな 下 さんとバス代を値切ろうとした若いネパールの3人をすわらせたので、何時間もきゅうくつな思いがりとしたバスの旅だった。

我々をとり囲んだリキシャ夫たちは、何とか自 分のリキシャに乗ってもらおうと、押し合い、ど なり合う。そんな中で料金をかけあい、リキシャ を選ぶのには、強心臓と大声がいる。ここはもう インドなのだ。

この時は、私と友人のTさんは、リキシャ夫の 客取り合戦を「やっぱりインドだな」と眺めていればよかった。同行していた、かつて何カ月かインドをまわったことのあるS氏が全て交渉してくれたからだ。私とTさんは1976年1月末に日本を発ち、主に空路を利用してインドとネパールを3週間ばかり旅していた。女2人の旅ゆえ、安全を第1に考え、ホテルも飛行機も日本で予約をしていった。だが本当は、もっと自由でもっと土地の人々にふれるような旅がしたかった。だから、ネパールから陸路でインドに行くというS氏、KS氏の旅に便乗してここまできたのだった。

リキシャの乗りごこちは満点である。ゆれは少ないし、顔にあたる風がここちよい。リキシャといっても、我々の行ったアグラ・ペナレス、カトマンズ、そしてここビルガンジーなどでは、自転

車を改造して3輪車にし、2人乗りの座席をつけたものであった。リキシャ夫は軽快にペタルを踏むが、私が一度ペタルを踏ませてもらった限りでは、まっすぐに走るのが難しかった。

10分も走るとネパールの出国管理小屋があり、 車夫は「そこに行け」と教えてくれる。簡単にOK がでる。

どんな風だったか、これを書いている今はもう 記憶にないほどの国境を越え、インドのラクソー ルの町にはいる。インド側の税関に行く。我々が・ 中にはいった時、先にはいっていたS氏たちがム スッとした顔で出ていった。お役人の応対が悪か ったらしい。ところが私とTさんがはいってゆく と、みだしなみのきちんとしたお役人はあいそよ くイスをすすめてくれる。パスポートを差し出す と、それに目を通しながら、「2度めの入国のよ うだが、インドをどう思いますか」とにこやかに 尋ねる。1週間程インドをまわってみておもしろ かったので、「すばらしい国です。だからまた戻 ってきました」と答えると、嬉しそうにうなづい てパスポートを返してくれた。応対はていねいだ し、すぐにOKを出してくれ、そこまではいうこ となしだったが、最後に握手を求められたのは不 快だった。

日本に握手という習慣がないせいだろうか、イ ンド、ネパールを旅行中一番嫌だったのは握手を 求められることだった。始めは、インドはそうい う風習なのだ、と思って心よく応じていたが、そ のうちに苦痛になってきた。インドの男性の我々 に対するなれなれしさが鼻についてきたのだ。好 奇心結構。だからおしゃべり結構。でもなんで我 々、いや私は見知らぬ男性の手を握らねばならな いのか。日本には握手なんて人の手を握る習慣は ないんだぞ、と心の中で思ってみても、差し出さ れた手を握ってしまうこの弱さ。握手は女性から 差し出すものだぞ、ほんとうは。ああ手袋が欲し い、なんて、ぶつくさつぶやいたりもした。握手 がインドでひんぱんに見られる習慣であったなら、 私ももう少しがまんできたのだが、実はあまり見 かけなかったのだ。疑問に思ったのは、彼らが白 人の女性と、握手をするだろうか、ということだ。 おそらくしないんじゃないか。 — そう考えると、ますます嫌になってしまった。インド人だから握手をするのが嫌だというわけではない。日本人の女性である我々だけに手を出されると考えると、親しみとは違う何か気味の悪さを感じてしまうのだ。私の偏見であるかもしれないが………。

つけ加えるなら、我々が女二人で旅していた間、 危険は起こらなかったし、また感じもしなかった。 だが、ホテルのボーイなどが、下品な話をして我 々をからかうことはあった。そんな時、白人でも なく、インド人でもない女であることを、意識さ せられた。彼らの中に、日本人の女を見る特別な 目を感じたのは、気のせいだろうか。

すぐ隣にある入国管理小屋では我々は不愉快なめにあった。S氏たちと4人いっしょに、中年のきれいにひげをそったお役人と対面した。書類の処理は彼の手でじつにゆっくりと行なわれ、我々は長い間イスにすわっていなければならなかった。やがて彼は何を思ったのか、ひげを伸ばしているS氏に向って、「ひげを生やしていない方がいるということを話しだした。夕暮れもせまってくかさし、長居はしたくない建物で、我々は早く釈放されることを望んでいた。一体、ひげと我々の入国とどういう関係があるのだろうか。彼は私に向ったとどういう関係があるのだろうか。彼は私に向った「マダムはひげが好きか」と聞いた。あきらかにNo、という返事を期待している口調だ。だから、

私はその時から急にひげが好きになってしまい、「Yes」と答えてやる。彼は自説を上たが、それでもなおもたが、それでもなおを主張する。ついに、KS氏が腹をたでしまって、「早くしろ」と日本から、と日本の方を見てから、お役人はSK氏の方を見てから、るりとした口調で「彼は怒ったた。かっくりとした口調で「彼はおこっているんだ。(He is not angry, He is hungry.)」と私としては気のきいた(?)ジョークを言ったが、それでやっと釈放。ヤレヤレと外に出た時には、もう夕暮れがせまっていた。

その夜は、いつの間にか自転車に乗ってリキシャの横についてまわり、宿を紹介するという若いインド人に連れていっ

てもらったツーリストロッジに泊まる。一泊ツインで8 IR(320円くらい)だった。そこはカトマンズからやってきた若い旅行者でいっぱいだった。

翌朝は、ラクソールの町の雑踏の中で、ムザフ ァプール行きのバスを探して乗る。バスは混んで いたが、なんとか席は確保する。しばらくすると、 S氏とKS氏は、「そこはレディスシートだから 男はすわってはいけない」と車掌に注意され座席 から追いだされてしまった。でっぷりと太ったサ リーのおばさんが彼らをにらんでから、デンとす わる。ヒンドゥー語で書かれていてわからなかっ たのだが、バスにはレディスシートと言って女性 専用の席があるのだ。カルカッタの市電にも、カ ルカッタからニュージャルパイ グリまで乗った2 等寝台車の場合、レディスシートは、コンパート メントのようになっており中から鍵ができた。女 性だけで汽車の旅をする場合、レディスシートを 利用すれば安全な旅ができるのではないかと思っ た。レディスシートでない寝台車でも別に危険な ことはなかったが……。

近頃は日本の映画館などにも、女性専用席というものがあるが、インドの乗物にあるのはどうしてだろう。(インド人に聞いてみればよかったのだが……。女性の地位が低いと言われているので意外であった。イギリスの影響かと思ったが、イギリスにはそんなものはないそうだ。昔からの



習慣なのだろうか。

もう1つ、インドの女性に関することでおもしろく思ったことは、汽車の切符など並ばなければ買えない時があるが、そういう場合女性は割り込みが許されるのだそうだ。アッサムに住んでいたというアメリカの婦人は、その特権を利用して切符を買うのだと言っていたが、我々にはその心臓はなかった。

サリーを着て歩いている女性は美しかったが、 おしとやかという感じは受けず、むしろ堂々とし たたくましさみたいなものを感じた。男どうし手 をつないで歩いている男たちより、大きな胸と大 きなおしりで堂々と歩いている女性の方が貫禄が あった。夫婦を見ていると、奥さんの方がデンと 構え、ダンナさんの方がチョコチョコ走りまわっ ているみたいであった。インドでは女性は家庭の 中では尊重されているらしいし、実際にいちばん イバッているのは主婦らしい。(評論社刊「サリ -の女たち」より)とは言うものの、やはり女性 の地位は低いのではないかと思う。働いている女 性がひどく少なかったし、割り込みが許されるの は、社会的な訓練がなされていない――つまり女 性を1人の自由な人間として見ていないのではな いか、と思うからだ。

※※※ 2等列車でカルカッタへ ※※※※

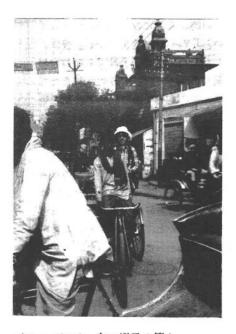
バスは地平線まで続く畑の中の道や、泥レンガ作りの農村の中を走って、昼頃ムザファブールに着いた。ムザファブールからカルカッタのハウラ駅までの旅行は、いよいよ天下に名だたるインド2等列車の旅である。インド関係のガイドブックや旅行記を読むと、汽車は1等から3等まで3クラスにわかれていると書かれているが、「ヒマラヤ」1975年WINTER号の沖氏の「体験的デリー案内」には、「3等はだんだん廃止されつつある」と書かれていた。インドに詳しい友人の話では1975年10~12月頃に廃止されたらしいが、はっきりとはわからない。我々の乗った汽車は2等が最低のクラスであった。

14時55分、汽車は定刻通り発車。今ではメチャメチャ遅れることはないようだ。インド滞在中、6回乗ったが、いずれもほぼ定刻だった。2等列車の中は、5~6人がけの木のベンチが向かいあ

っており、狭い通路を隔てて1人がけのベンチも向かいあっている。背もたれはそのまま天井までのびており、通路側にドアをつければコンパートメントになる。ベンチの上には、それと同じくらいの幅の網ダナがあり、さらにその上に半分の幅の網ダナがある。我々は、荷を網ダナに載せ、占領しておく。夜になったら、網ダナで寝るためだ。背もたれもベンチの下の部分も平らな一枚板なので、長くすわっていると、おしりが痛くなってくる。そんな時に、体を伸ばして寝られる網ダナは最高のベットだった。

1等に乗ると(ニューデリーからアグラまではタージ・エクスプレスの1等に乗ったのだが)、イスは応接間によくあるような黒レザー張りのゆったりしたもので、2人ずつ向きあってすわる。すわりごこちは満点で、おしりは痛くならない。ボーイが注文をとりに来て食事も運んでくれる。驚いたのは、窓に鉄格子がはまっていたことだ。それなりの理由があってのことだろうが、家畜車で運ばれているような錯覚を起こしてしまった。

2等列車の中には、いろいろな物売りが次から 次へと押しよせる。「チャーイ、チャイ、チャイ」 と、ミンミンゼミの鳴き始めの時のようなイント ネーションでチャイ売りが来る。チャイとは、紅



ベナレスにて 白い帽子は筆者

茶にミルクと砂糖をいれたもので甘くておいしい。コーヒーカップに注いで売り、あとでカップを回収にくることもあるし、素焼の小さな碗で売りに来ることもある。素焼の場合、飲み終ったら捨てればよい。使い捨ての容器なのだ。しかし、紅茶に土の味がしみこんでしまいおいしくはない。一杯30パイサから50パイサ(12~15円くらい)だった。

また、パン売りもよく来た。「パン」と言ってもプレッドのことではなく、10cmくらいの青い葉に白やら黄色やらの練りがらし状のものを塗り、とうがらしとおぼしき粉や塩をふったもので、ガムのようにかむものである。不思議なことに、赤いものは何一つ使っていないのに、口の中はまっかになる。その赤い唾液を道にはくものだから、インドの道の隅はところどころ赤く染まっている。

旅仲間の一人が、「パンを一度ためしてみたらどう。食べた人間に聞いたら、何とも言えない恐しい味がするって言ってたよ」とすすめてくれた。 冗談じゃない。好奇心の強い私でもそれだけは遠慮する。その時すでに、私とTさんはインド料理恐怖症にかかっていたのだ。

インドに着いてすぐ、市内観光バスに乗ってデ リーを観光していた時のことだった。昼食にと降 ろされたところは、大衆食堂のような所で、全て インディアン・メニューだった。私とTさんは、 始めてのインド料理を期待して待った。インド料 理の辛さに耐えられるだろうか、七味をかけすぎ たうどんを食べるのより辛いだろうか。期待(?)に 反して、運ばれてきたものはそれほど辛くはなか った。我々には塩味が足りなくておいしいとは思 わなかったが。「なんだこんな程度の辛さか、イ ンド料理なんて大したことない」と思った。隣の テーブルのオーストラリア人夫婦は、ライスとチャ パティに塩をふって食べている。その時我々は、 その2人に同情したものだった。「ライスとチャ パティに塩ふって食べてもおいしくないのに。な ぜ他のものを注文しないのだろう。」あとで彼ら の方が賢明だったのを悟ったのだが。再びバスに 乗って 1時間もすると、我々は胃が気持ち悪くな ってきた。胃の中がメラメラと炎をだして燃えて いる。ムカムカしてたまらない。 しばらくすると おさまったものの、とにかく嫌な気持ちだった。 にもかかわらず、アグラでもう一度インド料理を

食べて、またまた胃が燃えているような感じを味 わって以来、インド料理は見ただけで胃が拒否反 応をおこすようになったのだ。

インド料理が食べられなかったのはショックだった。外国に来て、外国の食べものが食べられないなんて……。日本食なんてちっとも恋しくなかったが、インドに来て西洋料理じゃつまらなかった。カルカッタやダージリンでは、中国料理やチベッタン料理がおいしかったが。

列車は立っている人もいたが、それ程混むこともなくカルカッタをめざしていた。きたなさというものを予想していたが、車内はきれいだったし、トイレも日本のより立派じゃな電燈がついたが、また、日暮れて、小さな電燈がつける。では、は暗かった。おまけに時々消えたもないのである。こんな時は日本男性がいてくれのラ駅に着いた。さっそく荷物を確認する。全て無のとし、パスポートやらお金やらをいれた袋をまくたでいたら、朝起きた時、マクラがなかったりに寝ていたら、朝起きた時、マクラがなかったりだ。何もとられなかった我々は幸運だったのかもしれない。

×××× カルカッタの力車 ××××

プラットホームは霧雨にけむっていた。頭の中に眠気は残っていたが、インドで一番インドらしいといわれるカルカッタに着いたのだ。不安と期待が入り混じる。駅は大きくて立派な建物だった。それにきれいだ。ちょっと拍子抜けした感じで外に出たら、眠気がすっとんでしまった。まだ朝早いのに人力車の群なのだ。今まで見てきた自転車を改造したリキシャではない。人間が足でもってより。ぱるアレ、明治時代にあった本物の人力車なのだ。道路は舗装されている。駅は立派な建物だ。大きな橋が見える。自動車がたくさん走っている。そして目の前には人力車。インドは全くなんという国なんだろうか。

ポケッと見ていたら、やせた車夫の間を白いひげと服の老人が小銭を集めてまわっていた。行者なのだろうか。それとも人力車の貸し主か。パール・バックの「大地」が思い出された。その中の主人公、王龍は飢饉のために農村を脱出して都会

で力車夫として働く。彼が倒れそうになりながらも力車を引っぱって得たお金のほとんどは、力車の貸し主の手にわたってしまう。彼の妻と子らは、乞食をして飢えをしのぎ、堀っ立て小屋の中で生きてゆく。——今、目の前にいる車夫たちも王龍と同じような生活をしているのではないだろうか。彼らの生活を想像するとつらかった。

我々はその時、人力車に乗ってトラブルがあったのだけれど、私は車夫を責める気にはなれなかった。1台の人力車には男性3人(ムザファブールから我々は一行5人になっていた。)、もう1

台には、私とTさんと我々全員の荷物 ——これだけの重量を、やせたはだしの男がひっぱると言うのだ。やはり無理だった。500 mくらいで彼らは力尽きた。欲ばりすぎたのだ。そこで料金を払う、払わないでもめたのだが、結局、中に別のインド人がはいって仲裁してくれ、我々は料金を支払った。それがどれだけ彼らの生活の足しになっただろうか。人力車の乗りごこちは悪かった。

こうして、我々のカルカッタ第1日**めは**始まったのだった。

(つづく)

\otimes 労山 $^{\prime\prime}$ 海外登山集会 $^{\prime\prime}$ 参加報告— 1月15日 \sim 16日—東京 • 本郷(ふきた旅館) \otimes

内外での活躍がめざましい「日本勤労者山岳連盟」(労山)では、1972年のヨーロッパから始まるこ こ数年の毎外登山の報告を中心とした集会を開催した。

全国から参集した約50名の岳人が出席した。豊田理事長の挨拶・HAJ代表の挨拶後、記念講演に入り、去年インドヒマラヤの離ナンダデビィの縦走に成功したJAC隊の鹿野勝彦氏が「何故ヒマラヤの縦走を考えたか」を中心に今後のヒマラヤ登山の方向などにも触れ興味ある話で約40分の講演を終えた。なお、数十枚のスライドにより縦走の模様が紹介された。

次いで森田稲吉郎氏による「基調報告」が行なわれた。「海外登山=国際交流の発展のために」と題し 以下の骨子により報告した。

- ①インド・ネパールへの公式訪問
- ②海外登山の新しい情勢
 - ①ソ連アルビニスト達のバミールや天山での活躍は体力トレーニングのたまものである。 **@合同**登山が増えつつあるが単に登山に終わるのではなく、国民・団体との文化交流を行なう。
- ③推薦制度の問題点
- ④豊かな海外登山を

①絶対に遭難を起こさない 回トレーニングを充分に行なう ○労山らしい登山 ○ステップを踏んだ登山 母じっくりと研究を ○国際感覚のある活動を

以下各隊の登山報告が8ミリやスライドを使って行なわれた。

- (1)アリラトニ・ティバ (5470 m) 15名 1973 年定屋橋勤労者山岳会
- (2)南バイハリジョット(6300 m)5名 1973年溪嶺会(下部岩壁帯の登攀がみごたえがあった)
- (3)北バイヘリジョット (6290 m) 5 名 1973年長野県勤労者山岳連盟
- (4)Mt クック2名 1973年川崎労山
- (5)ワガルチョ(5748 m)7名 1975年高松勤労者山の会
- (6)シャカルベー(6201 m) 15 名 1972 年群馬県勤労者山岳連盟
- (7)ダウラギリ **V峰** (7661 m) 14名 1975年カモシカ同人(長大な稜)
- (8)ハンチントン(3731 m) 6名 1976 年大阪府動労者山岳連盟(西壁から)
- (9)マッキンレー(6191 m) 6名 1976 年長野県アラスカ登山隊
- (10)マイクトリ(6803 m)8名 1976年東京都勤労者山岳連盟(マイクトリとデヴトリの交差縦走) 質疑応答の後1977年の計画として
- ①ナンダデビイ ②ドウナギリの2隊の発表が行なわれた。

(山森欣一 記)

インド通信 (8)(9)

ニューデリー 10月10日

<アルナーチャルのデリー出発機関>

F 104 Curzon Road Hostel, New Delhi というのがアルナーチャルのニューデリー・オフィスのあるところだ。 Kasturba Gandhi Road をいくと見つかる。歩いたってたかがしれている距離だ。スクーターで1ルピーとちょっとかかる。

この Curzon Road Hostel には一群のアパートがあるところで、普通のアパートの中のF棟が State Govt. Office になっている。同じF 棟にミゾラムやマニブールのオフィスもある。ここは普通のアパートと同じ作りなので見つけにくい。州政府の役人の宿泊所も兼ねている。

アルナーチャルのオフィスで私が最初にコンタクトをとり、会いに行ったのが、Liaison Officer のMr. Raj. Vaidだ。アルナーチャルのオフィスが F 310 となっている資料があるが、これは彼の住居でオフィスは F 104である。

ところが幸運なことに、ちょうどアルナーチャルから Chief Secretaryというかなりのエライ人がきていて、会う機会を作ってくれた。名前はうかつにも聞きもらしたが、おそらく Mr. Yusuf Ali だと思う。

彼はもう25年もアルナーチャルにかかわっているという。彼が言うにはアルナーチャルへの許可申請とその発行権限は内務省(またもやダ)で外務省ではないという。それで、今、アルナーチャルはインド人のツーリストむけにオーブンの準備を進めているという。ボンディラのロッヂも、小さいのができたそうだ。しかし、外国人のツーリストにはオーブンする計画はないそうだ。が、インド人のツーリストへのオープン、これは時のかにしないけど、近い将来確実なことだと思う。アルナーチャルのインドツーリストへオーブンの準備が進行中というのもすべてインド中央の万針によるもので、アルナーチャルの地方行政体はつんぼさじきみたいなもので、それは内務省がきめる。

ところで、この Chief Secretary はたいへん大

柄で、感じのいい人だ。とても気さくに話してくれ、まわりの役人が直立不動でかしこまっているのに、別にいばりちらしているでもなく、役人らしからぬ人で、好惑がもてた。ところで、ナガランドにしろマニブールにしろ、そのLiaison Officer なり Chief Secretaryというのはナガ族なりその土地の人がなっているのだが、アルナーチャルに限ればそれはすべて、いわゆるインド人だ。アルナーチャルの扱いが特別なのかな?

で、とにかく、そのChief Secrefaryに、外国 人にオープンするときは是非知らせてくれとたの んでおいた。

< V. エルウィンのこと>

Liaison Officerに会いに行ったのに、この Chief Secretaryと話して帰ってきた。 彼といろ いろなことを話したが、私が前から気にしてい た Verrier Elwinという人物について聞いてみた。

使はイギリス人でインドに最初はForeign Missionの一員としてきたそうだ。そして、インドの情況を見て、彼はイギリスに反應をひるがえしたという。この Chief Secretaryは25年もアルナーチャルにかかわっているのだから、当然、彼とは面識がある。「彼は人類学者ではなく、ヒューマニストだった」と Chief Secretaryはいったが、これは、私がエルウィン論をまとめるにあたってのいいヒントになった。エルウィンの自伝はまだチにいれていないが、これでなんとなく『私はガンディのゼーヴマークラムのアーシュラムから、ネールの科学的な真理を伝えるために、トライバル・ワールドに接近していった………』というエルウィン自身の言葉と関連ができてきた。

今回、アルナーチャルへは入れないかもしれないが、それをとりまく無数の回路のうちいくつかを確実にたどれそうだ。あるいは、エルウィンのルートをたどってイギリスや中央インドにも行ってみようかとも思っている。

ガーンディ、ネール、そして、エルウィン。 これらの三者をからめたうえで、彼らはトライバ ル・ワールドにどうかかわっていったかというこ とは、それは、単なるガンディ論、ネール論 を越えた上で興味があり、またむずかしいことだ。 さて、アルナーチャルの首都である、イタナガルだが、これは1973年に最初に着工したそうだ。 だが着工後半年間は手がつけられなかったという。

アルナーチャルへの接近を考えるなら、許可は デリーだが、まずシロンに行くといい。「東部ヒマラヤ・ニュース」にも書いたが、ここに North Eastern Hill Univ.というのがあり、まわりの 丘陵部から多くの人々がきている。もちろんアルナーチャルの出先機関もここにある。アルナーチャル発行のバンフレットももらうことができた。 カルカッタ、シロンとアルナーチャルへのルート をたどっていくことにする。

アッサム・ハウスはカルカッタばかりでなく、ニューデリーにもある。 1 — Kautilya Lane というところで、Panch Sheel Marg のそばにある。ちょっとコンノートからは離れていて、スクーターだと 3.5 R S ~ 4.0 R S 位かかる。カルカッタ程の規模はないがインフォメーション・センターを併設している。Special Commissoner がMrA。P. Sarwan. Liaison Officer がMr. Barua. Information Centre の Offcer はMr. J. K. Dassである。

* *

アッサムやメーガラーヤはかなりきびしくなっている。シロンもかなりうるさい。シロン以外は行けないとのこと。チエーラブンジはダメだそうだ。しかし、これは現地交渉の可能性が多分にある。

<まとめ>

インド東北部(マニブール、メガラヤ、アッサム、アルナーチャル、トリブラ、ナガランド、ミゾラム)と一巡して感じたのだが、インド内務省を軸として、この地域である統一した動きがある。それは中央集権化のあらわれだが、どの州もほりさげていくと、内務省の壁が出てくる。要するに、特にがっちりと内務省がおさえていなければならないところで、内務省も必死で、「外国人なんか入れるもんか」いうところだろう。

この地域にある政治的共通性というのは、この 地域の中の直轄領を担当しているのがUnion Ministry of Home Affirs という内務省の一セクションだからだ。また、1972年以降法律的にこの地域の扱いが大きく変っているので、日本で得られる資料は古すぎて、役にたたないので注意する必 要がある。

インドの立入禁止区域をねらうなら、とにかく インド内務省を落とさない限り合法的にははいれ ない。

インド内務省もまた秘密主義で、どのセクションが何をどのように担当しているかは、おしえてくれなかった。アルナーチャルをあやつるのは、内務省なのだ。

しかし、インドでのインド東北部に関する情報 電は増大の一途をたどっている。政府の方針(内務省の)として意図的に多く流布されている面もある。インド東北部一帯に関する昔の本のリブリントもあいついでいて、アルナーチャルは当然として、マニブール、トリフラ、ナガといった、今まであまり表に出てこなかったところの本が多いのにおどろかされた。ただ、本の値上りはインドでもかなりすごい。ちょっとしたものでも80 R S はする。買いたい本を買ったら、あさってにでも日本に帰らざるを得なくなりそうなぐあいだ。

インド通信 (10)

1976年10月18日、 ラダックのレーにて **<ラダック周辺のこと**>

今は、10月末でもうすぐ道路が閉鎖されるというのにぞくぞくとツーリスとがやってくる。つい10日程前は、東洋大と学習院大のハーティがレーの町に滞在していた。

18日にレーの Assistant Commissioner に会いに行った。レー~マナリロード(パララチャ・ラ由)の許可権限はその Assistant Commissioner のいうには、Ministry of Defenceがもっているので、もし通りたければそこに接触せよといっていた。しかし、今シーズン、レーでDeputy Commissioner の許可だけをとってマナリに行って、そこでつかまったツーリストがたくさんいたという。

カルギル〜ザースカール〜レーにジーフ用の道路建設中。NUBRA VALLEY が近々オーブンされるようだ。いつかは言えないが、確実にオーブンされるという、今シーズンはもう無理としても、近い将来オーブンされるというのだから、来シーズンあたりではないだろうか。

NUBRA VALLEY とは具体的にKHARDONGLA

を越えてLiakzumのことである。

活字中毒が少しは直るかと思ったけど、どっこいそう簡単には直らなかった。目が横文字の新聞 や本を読むのに慣れただけだった。

どっかの町で会ったある日本人が、旅行中新聞を読むなんてことはしたくないといっていたが、残念なことに私はインドに神秘なるものや"ロマン"を求めてやってきたわけではないので、そういうわけにはいかない。もちろん、現在、インドがものすごい情報管理下にあることを承却の上でそういっているのだが………。

それにしても、その日本人、いっぱしのジャーナリスト気どりでいたけど新聞を読まないジャーナリストがあるだろうか。

主として新聞、雑誌で北東インド関係の記事をあたっているが、アルナーチャルにしろ、アッサムにしろかなりの情報量がある。日刊、週刊、月刊etc。インドではおびただしい量の雑誌がでているが、ことアルナーチャルに限っても、それに関する記事がのっていないことはない。

「Illustrated Weekly of India」ではカラー特集をのっけているし、多くのインドの新聞にも記事がたえない。たまたま、アルナーチャルのPrime Minister がインドの国連代表団の一員として、国連総会に出席しているのでその記事も目につく、シッキムのチョーギャル重体の記事も目に付く。インド共産党(CPI)=ソ連紙・現ガーンデー政権支持=の「New Age」という月刊紙でも必ず北東インドのことがのっている。反面、反政府系の出版物はみんな統制され"地下"にあり、およそ目にふれることはない。 おそろしいことではないか。仮に手にはいっても、そんなものをもってたらブタ箱入りだ。インドは我々の想像以上に公案、秘密警察スパイがウジャウジャいるのだ。

インド通信 (11)

10月29日 ニューデリー

<アッサム関係情報>

入域許可取得の方法は3年前(1973年冬)とはかなり違っているので注意していただきたい。

まず、第一に、以前はメガラヤ(Meghalaya)はアッサム州内の目治地区みたいなものだったので、シ

ロン(Shillong)への訪問許可は、アッサム・ハウスで発行してくれた。ところが、今はメガラヤは一個の独立した別の州となったので、シロンの許可はアッサム・ハウスではおりない。

許可発行権限をもっているところをあげると、 アッサム州全地域

- ① Foreigners Regional Registration Office (F. R. R. O)
- ② Trade Adviser and Director of Government Assam Hoase Calcutta.

シロン ①F. R. R. O

Gauhati ①、②の他に

(3) Deptey Commissioner, Kamrup Gauhati.

Kaziranga (1)、②の他に

4 Chief Secretary Govt. of Assam Shillong

Manas (1), (2)

F. R. R. O はデリー、ポンベイ、カルカッタ、マドラスなどにあるが、たとえばデリーの F. R. R. O は飛行機でデリーからアッサムを訪れる場合のみしか受つけようとしない。要するに面倒くさがっているのだが、カルカッタでとれという。ついでだが、デリーの F. R. R. O は最近 Pt. Pant Marg から Tilak Marg にある Hans Bhavanの 2 階に移転した。それに、カルカッタのアッサムハウスは許可発行権限があるが、デリーのアッサムハウスにはない。ダージリンを含めてアッサムの許可は1週間以内だったらデリーでとれる。申請から受理まで 2 日かかる。

ツーリストにオープンされているのはManas.
Kaziranga, Gauhati、それにMeghelayaのShiーllongだが、他の町もたとえば Jorhat, Dibrugーarh も入れる。というより申請を受けつけてくれ一応許可はおりる。これは予想外であった。

デリーのアッサム・ハウスに Informetion Centre が併設されていて、オフィサーはMr. J. K Dass で彼のスタッフとも大変感じがよくていい 人達だ。

そこなどといろいろ相談した結果、やはり、 東の中心地カルカッタでアッサムの許可をとる場 台はアッサム・ハウスのTrade Adviserからとる こと。彼には全域の許可発行権がある。そして、 アッサムハウスでアッサムの許可をとってから、 カルカッタのF. R. R. O に行きシロンの許可を とるのだ。それが一番いい ということになった。 また、期間は1~2週間位は簡単におりるそう だが、1か月となるとむつかしいかもしれない。 また、陸路でいくよりは空路の方がやさしい。陸 路の場合いろいろ制限がある。

Shillong, Gauhati, Manas, Kazirangaの1~ 2週間の許可は簡単にとれると思っていい。それ 以外の地域や、長期間の場合は少々時間がかかる。 しかし、入域後 Shillong, Gauhati, などでの 延長は可能。

インド通信 (12)

11月9日 カルカッタにて

11月8日カルカッタにあるインド北東諸州のオフィスをまわり、いろいろ情報を集めた。

O ASSAM HOUSE

アッサムを訪れる旅行者も多くなった。3年前の比ではない。Gouhati, Kaziranga, Manasには毎年多数の旅行者が訪れている。日本人もかなり多い。

Jorhat, Di bragarhにしても、許可をとって訪れる人があとをたたない。

Di bragarhの近くに Num rap という町がある。ここに化学プラントを建設中で、日本人技師 5人が長期帯在している。 Nnm rup といえばアルナーチャルの Ti rup Div. のすぐ近く、ここは石炭、ガス等を産出するところなのだ。 ちなみに、建設請負いは不動化学(株)、この日本人を訪問するという名目で Di brugarhの許可はとれる。

Assam House の Trade Advisor はアッサム全体の許可を発行できる。しかし、その場でくれるのは (午前中受け付け、当日午後 3 時発給) Gauhati, Kaziranga, Manas.のみ。あとは、Telegram で Gauhati にある Passport Control に照会となるので少々時間がかかる。だから、他のアッサムの町々を訪れたい場合は Gauhati のみの許可をとって、 Gauhati で直接 「Deputy Secretary Passport Dept. Dispur Gauhati 」を訪れ許可をとるといい。アッサムの他の町も、"友人訪問"とか……の理由で申請するとよいであろう。3 年前はこのカルカッタ Trade Advisorも外国人がめずらしかったとみえ、感じがよかったが、今

はもう機械的そのものである。

Meghalaya House

インド通信(9)でシロンの許可にふれて、カルカッタでシロンの許可を出せるのはForeigner's Registration Officeといったが、それに加えて Meghalaya House のTrade Advisorも出せる。観光目的で1週間位、Shillong と Cherapunjをくれる。他のMeghalayaの町は、Shillong の Meghalaya 州政府で再申請する。発給は翌日になるなお、メガラヤ・ハウスはアッサム・ハウスのとなりにある。

O Tripura House

住所は 1. PRETORIA STREET

Arunachal House

ここはもう大変おもしろいところにある。僕は Arunachal が好きなのにまして、このカルカッタ の Arunachal Houseが大好きだ。場所は、住所の 上では、4 - B Chowringhee Place, Calcutta-13、だが、詳しくいうとニュー・マーケットのと なりだ。それで"ROXY"という映画館の4階に あるのだ。映画を見る客にまじって人をかきわけ かきわけ入って行く。何と、楽しいではないか。 収穫はパンフレットのみ 情報としては、アルナ ーチャルのインドツーリストへのオーブンはイン ナーラインのこっち側の範囲で、アルナーチャル ・ハウスの役人でさえ(エライさんは除く)、イ ンナーラインを越してアルナーチャルの奥へ入る ときは許可がいる。しかし、デリーで偶然会えた Chief SecretaryのMr. Yusat Aliktかなりの人 物らしい。いろいろ……。おもしろい人に会えた ものだっ

デリーとここのアルナーチャル・ハウスを訪問して手に入れたパンフレットは、だいたい過去において発行されたものの90%だろう。アルナーチャルみたいなところでは、パンフレットといえども貴重な資料だ。

総合して

ニューデリーにおかれている「~House 」というのは本当に中央との連絡にあたる性格が強いが、 カルカッタのそれは、中央とのうんぬんよりは、 州への補給・輸送のためのそれのようだ。中心的なセクションはSupply & Transport である。

O Foreigner's Registration Office

ダージリン、シロンの許可を出す一方、ビザの延長の扱いをしてくれる。東京を出るときは"インドでのビザは3か月のみで延長はきわめてむずかしい"とおどかされていたが、何のことはない。1回目の3か月の延長は即受けつけてくれる。期間切れの1週間前に申請。まあ、許可になるかどうかは知らないが、現に延長して滞在している日本人に沢山あった。2回目延長した人もいる。

O Bangla Desh Consulor

Circus Avenueの9番地にある。インド、バングラ関係の悪化か何か知らないが、"鉄壁の守り"の領事館で中も一見要塞ふうだ。何故バングラ・デシュに行くかというと、仮にシロンの許可をとった場合、Sylhet を経由してバングラから陸路 Shillong へ入れないかと思ってだ。また、ダージリンに行くときも、バングラの国内を通ってSiligriに出れないかとも思っていたのだ。このルートはおもしろい。

しかし、結果は「NO」。クーデターやガンジス川の水争以来、関係は悪化し、国境は閉ざされている。インド、バングラ国境で越せるのは、西部のJessoreと東部のトリプラのAgartalaの2つだけ。外国人はAgartala には普通行けないので、要するにJessoreルートのみ。

しかし、バングラの役人は親切だった。他の人 そっちのけでわざわざ目分でメモを作っていてく れるのだ。ちなみにバングラ・デシュの仏教徒人 口というのはかなり大きいのだ。今いる Bengal Buddhist Association の寺の Rev. Dharmapal Bhikkhuも、もともとはバングラの坊さんなのだ。 そこで、私は"ニワカ仏教徒"になっている。

バングラでは旅行制限地域はない。近々、Gauhati でYouth Congressの大会がありとんでもない人が集まるようである。14日からは大博覧会だ。日本からの公式招待客もくる。日本領事館員が、墓参のことでインパールに行ったもよう。

インド通信 (13)

11月21日 ゴウハーティ

ここ、ゴウハーティはアツサムの玄関口であり、逆のぼること約1300年前、カーマルバ王国の栄えた地でもある。今、ゴウハーティの町はA. I. C. C.(All India Congress Conference)という官製のお祭のため町をあげての狂態をさらけ出している。インドのみならず世界各国から、万の単位で人がこの小さな町に集まってきている。

重要事項テーマ別解説

① 許可関係

カルカッタのアッサムハウスでもアッサム全域の許可はとれるが、それはすべてアッサム州政府のDeputy Secretary、Passport Department というセクションにテレグラムで照会になるので、返事を受けて、許可証を受け取るまでにかなりの時間を要する。

カルカッタのカウンターで即座に交付される許可はMANAS、KAZIRANGA、GAUHATI のみだ。

だから、もし上記3カ所以外の土地を訪問しようとする場合は、アッサム・ハウスでゴウハーティのみの許可を10日間位をもらって、ゴウハーティ到着後、Dassport Department に直接出向き、そこで延長なり、新たに許可をとることになる。

Passport Department はアッサム州の一時的な首都であるDispur(ディスプル)にある。ゴウハーティ市内からはCity Bus という私営のバスの便があり15分位で、料金は50 P位で到着する。Dispurの町より少し先に行ったところに造成されたばかりの平地があり、そこに平屋建の州庁舎が建っている。入口にガンディ首相のあの歩く姿の銅像が立っている。入口を入って左側、2つ目の建物が目指すPassport Department である。Office hours は10:30~16:30、昼休みはない。

許可される範囲は私が訪問した1976年11月中旬の情勢下で、ある程度私が「研究」、「友人訪問」という、正当な訪問理由をもっていたという条件を頭に入れた上で考えてほしい。

北辺のブータンとアルナーチャルとの境界の町をのぞき、ほとんど無制限に許可がおりる。 Dibugarh、Jorhat、Tezpur、Silchar、Lakhimpur、etc、 どこでもいける。

役人は、「この町も行けますよ」なんて、気のきいた親切は言ってくれない。とにかく、地図を目の前に広げて行きたい町を名指しして聞いていくのだ、O、Kが出れば、その場で申請書に、町の名をできるだけ細かく書いていく。

ゴーハテ 4の許可をとったから、近くの町まで行けるだろうと思っていると、そうではない。ゴーハテ 4の町しか滞在できない。滞在期間の制限はない。ないというよりも、だいたい訪問する場所に対して適切な日数であればそれこそ何十日でも許可はおりる。私の場合、約40日のアッサム滞在許可をとった。

これだけ簡単に許可がおりるというのは、ひとつAICCの余波であるということがあげられる。 当然、私のパーミットにはDibrugarhの名が書き込まれている。許可証は即日発行。タイプする間、30分ほど。役人と世間話でもしていれば、それこそノドから手の出るような許可証がもらえるのだ。役人の感じもいい、というよりヒマなのだ。

ただ残念だったのは、Darrangaというブータンとの国境にある町に行きたかったのだが、ここはボーダーエリアで駄目だったことだ。さて、この状態、いつまで続くか? ちなみに私のパーミットのナンバーは % 2 だったが………。

しかし、何故こう情勢が変わったか、ということは分析してかからなければならない。私は決して許可証取りのテクニック――HOW to――を人に伝えるためにこの通信を出しているのではない。

これらのことを通じてもう一つのインドを知り たいと思っているのだ。

登録

アッサムハウスでくれる許可証の「条件欄」に は、きわめて重要な、もし忘れたらブタ箱入りに なりかねないような一項が欠落している。

「この許可証を保持して、許可地域を訪れたものは、直ちにその到着と出発を、その地を統轄する S. P. O. (Superintendent of Police Offce) に報告しなければならない」という項である。

これは重要である、許可証はこの登録済の S.P. O.の裏書きがあって、はじめて生きてくると思ってよい。

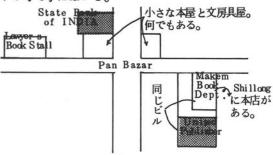
ゴウハーティの町の S. P. Oは DC Court の 近くのブラーマプトラ河の流れを見おろすながめのいい所にある、 DC Courtを目指していつて人に聞けばすぐわかる。まわりに〃オマワリ〃がウロついていることからも分る。

TOURIST OFFICE

Directorate of TourismのオフイスがPan - Bazarの近くにある。親切で役に立つ。ここでアッサム州の地図を1ルピーで買うといい。パンフレットもくれる。他に駅とDispur寄りにも支所があるがここの本局にくらべると見おとりする。

本屋

これはもう、ワタシは我を忘れて狂喜した。も う欲しくて欲しくてしょうがなかった、貴重な本 がホコリにまみれて本当にゴロゴロしているのだ。 およそ、インド東北部一帯の本はこのゴウハーテ ィの町で手にはいる。



Lawyer's Bookstallと United Publishers の 2カ所に本が沢山ある。

Lawyer's BookstallはGauhati Univ. の出版物 他の地方出版物を中心に学術書を扱っている。出 版もしている。

United Publishersはインド東北部のいわば日本でいう大取次にあたり、おいてない本はない。取次なので無理もきく。この2軒を訪れれば、あとの小さい本屋は無視してかまわない。私はこの2軒でリストアップしたアルナーチャル、アッサムマニプール、ナガランド、ミゾラム、トリプラ、メガラヤ関係の本は80冊以上になった。

貴重な本のリプリントも多いのにおどろく。で、全部買ったら 2000 ルピー近くなる。 100冊位のアルナーチャル、アッサム関係の本を前にしたら、もう、逃げられない気持だ。イヤでも一生かかっていかなければならなくなる。

(つづく)

<関係の機関・団体──その5>

ネール登山学校(ウッタルカシ、ガルワル、インド)

正式の名は "The Nehru Institute of Moun-taineering Uttarkashi (U.P.)" といい、故ネール首相が創立した登山学校である。校長は Col. Jagit Singh。 主任教官は Har Bhjan Singh。

青少年男女に登山や探検のことを教えることを 目的としており、初級コース (Basic)、と上級コース (Advance)の登山コースがあり、それに加え てアドベンチャー・コースがある。

1977年の開校はプレ・モンスーンは

初級コース 3月26日~4月24日(30日間、350Rs) 6月4日~7月3日

上級コース 4月30日~5月29日(") 6月4日~7月3日

ポスト・モンスーンは

初級コース 9月10日~10月 9日(//) 10月16日~11月14日

アドベンチャー 12月 6日~12月26日(21日間、100Rs) ・コース 1月 4日~ 1月24日(1978)

が予定されている。

登山コースは18才から40才まで、アドベンチャー・コースは15才から18才まで受けつける。

コースの内容は

初級登山コース

5日間、ウッタルカシでフィルドトレーニングをおこなう。登山のための体力作り、装備などの準備、岩登りを含めた登山基礎生活技術、医療について学ぶ。

次いで、リュックサックをかついでガンゴトリへむかう。高処に体を慣らしながら、岩登りなどをならう。ベース・キャンプでは岩登りに加えて 氷雪技術を学ぶ。力がつけば約5,500 mのピーク に登る。ベース・キャンプはガウムラク(3,800m)。

登山からウッタルカシにもどり、試験を受ける。 最後の夜はキャンプファイヤーを囲んで歌やおど りを楽しむ。

上級登山コース

ヒマラヤ登山を目指す人を目的にしている。より難しい岩登りや氷雪技術を修得する。そして、6,000 mクラスのピークに登頂する。下山後、ウッタルカシで卒業テストと卒業式がある。

このコースに参加できる人の資格は初級コース

で「A」段階の人、または同程度の学校などで登山 技術修得しそのレポートを願書と一緒に提出した 者に限る。

アドベンチャー・コース

21日間のうち10日間はウッタルカシに宿泊し、 クロスカントリー、バレーボール、テニスさらに は室内ゲームをする。残りの11日間はウッタルカ シからトレッキングに出て、岩登り、オリエンテ ーリング、野外生活などを学ぶ。

申請に必要なものは

(1)申請書 (2)健康診断書 (3)授業料 (4)パスポートの詳細 (5)初級コース終了証明書(上級コースのみ) (6)列車割引申請書(いずれも用紙は学校にある)

ただし、インド人以外は入学できないこともある。トレーニング地域がインナー・ラインのむこうになるからである。

入校中の写真撮影、自由行動は厳しく管理される。 ウッタルカシの位置

西ウッタル・プラデシュ・ヒマラヤにあり、聖なるバハギラティ川の川岸、標高1,150 mにある。バハギラティ川はガンジス川の源流の一つである。ニューデリーから汽車でリシケシに1日かかって着く。そこからバスで約7時間、タクシーなら5時間ほどでウッタルカシに着く。バス代は1等23Rs、2等18Rsである。ハルドワールからタクシーでリンケシに来ると少し時間が節約できる。

ウッタルカシの街のラダリ(Ladari)に登山学校 はあり、町の誰れに聞いても知っている。

なお、登山コースに入学する人は1日前に到着し、ベットや登山装備などを受けとる。個人装備も含めた一切の装備使用料、毎日5,000カロリーの食事などが前記の授業料に含まれている。医療設備もあり、もちろんドクターもいる。

電略は NIMOUNT、UTTARKASHI 電話は Uttarkashi 23番、24番

ウッタルカシには映画館はあるが、その他の観光的なものはなく、それに、ここはいわゆる"ドライ"(禁酒)地区なので、酒は一切飲めないし、もちろん売っていない。ツーリスト・ロッジもあって、静養するのにふさわしいところである。

近藤龍良

1976 HAJ カンミールツアーに参加してスリナガル周辺を漫歩してきた。

協会の役員ということで一行が無事トレッキングに出掛けるのを見届け、こちらもどこかのトレッキングのメンバーに入りこんで、一緒に歩く予定が一部手配などのトラブルがあって遅れてしまい、出そびれてしまった。それではと早速第2プランに移して、ゴルフだの観光だのいわゆる俗っぽい旅行に転じたのだが考えてみればわがHAJも昨年からA=Alpineの1字が抜けており、ポピュラーな会になったことなので山屋さんにはお叱りを受けるかも知れないがより一般的な観光旅行体験を記してみた次第だ。

まず何といってもメインエベントは世界一高い 処にあるゴルフ場でのプレイだ。グルマルグは 標 高 2,700~2,800 mにあり冬はスキーのゲレンデ に変る高原だが、夏の間中はゴルフ場としてオープンしている。 専属のプロも 2~3名いて一緒に 廻ってくれる。ただ彼らはとってもかケが好きなようで1ホール毎に手を出して握ってくる。 カケが 好で カーボール のゴルフ 場ではそんな事はギャンブラーだった。もちろん、こっちは初めてのコース が特にグルマルグで一緒に廻ったプロはギャンブラーだった。もちろん、こっちは初めてのコースで握るなんてことはしなかったが………。 気圧が 低いせいか馬鹿にボールがよく飛んだ気がした。 そんなことはないだろうが……。

途中からハダシで廻ったが気がついたらかれんな高山の花びらが足の指の間にはさまっていた。また、羊の群れの中に打ち込んだボールがいくら探してもなくロストとなってしまったがもしかしたら食べられてしまったかも知れない。

旅の楽しさは"出合い"にあるがハウスボートで知り合ったアメリカ人はラスペガス 出身の Mrs. グロリアさん。さすがラスペガスの出だけあってゴルフは得意中のものとか、早速挑戦を申し込んでスリナガル市内にあるゴルフ場で対戦となった。

スリナガルのコースは山地のゴルフ場と違って整備も良いが、やはり野放しの牛の群れには注意した方がいい。また、そのフンの中へ落すと拾

い出すのに苦労する。それにサイドに政府高官の家があるのかゴルフ場の中に鉄砲を持った兵隊さんが巡察している。下手に O B でも打ったら一発ぶっ放されるようなフンイキのホールもある。

さて勝負は恥ずかしながらアメリカン・レディとかけたビールの代金は小生が払った次第。無精にのどが乾くので水を飲んだのが運のツキでそれ以来トイレと親せきつき合いをさせられるハメになった。くれぐれもインドの生水は注意した方がいい。

もう1つの"出合い"は、泊ったハウス・ボートの隣船にお嫁さんがやってきたことである。結婚式だ。イスラム教徒のコスチュームを着飾って全くきれいだ。それまであまりカシミールの女性は目立たないので、気がつかなかったがカシミール美人のオンパレードに出会った感がした。

船宿のラザーク君が最後の日に催してくれたカシミール・ダンスの夕べもなかなか見応えのあるものだった。一種のジブシー・ダンスだろうがシルクロードからの由来のカシミール独特の曲でペルシャ風や、スペインのフラメンコみたいなものも入り混じった踊りを一流楽団つきで夜中まで楽しみ、船中は賑やかだった。近所の老若男女の住人がのぞきにきていて真けんなまなざしで眺めている顔付きをみているのも面白かった。

ダウンタウンはご多聞にもれずゴチャゴチャして異様なにおいが立ち込めている。忙しいのかヒマなのか判然としない顔つきが並んでいる。どちらにしてもインドへ行ったらば日本的な時間観念はさらりと捨ててインド的時間 — 1時間が約120分位 ——に考えて行動しないとイライラしてくる。といっても、遅れるばかりではなく早目に始まることもあるから厄介だ。

映画は街の人達にとってとても人気のあるレジャーの一 つだ。休日などは延々と切符売場に人が並ぶ。ヒッチコックの映画をみたが最後に犯人が割れる場面などは場内拍手で大さわぎだ。

ホテルで写真家の風見武秀さんに会って周辺を 3~4日一緒に廻った。さすがベテランプロ写真 家と一緒に廻っていると写真技術も向上する気分 になる。金8,500円也のバカチョンカメラで仰々 しく講釈を聞き乍ら同行したのではきっと先生も 迷惑されたことだろう。

パハルガムでの魚釣りはライセンスがいるそうで、お流れになってしまった。美しい溪谷でどの位のモノがいるか知らないが惜しいことをしたものだ。

また朝のしじまがあけぬ頃、湖上をわたるおご そかなイスラムの御詠歌(コーラン)がまだ夢心 地のわれわれの耳に入ってくる。

朝もやの立ちそめた湖上を舟で三々五々、人々が 集まり乍ら合詠しているのだろうと勝手に想像し ていたが山の上からのマイクの声だそうで一寸が っかりした。

夜のとばりも落ちる頃チシマシャイ庭園では

Sound & Light Show が繰りひろげられる。 7色のライトが交錯するなかで重々しい声でマハラジャと美しきお后の恋の物語りが始まる。折しも8月15夜の月が煌々と広い庭園を照らし出し涼やかな風を受けて世界各国からの見物衆はうっとりとしていた。

<ナンガバルバットも見えます。 K₂も御覧になれます>といううたい文句につられて、一寸した高地迄出掛けたりしたがいずれも姿を見れなかった。やはりスリナガルまできたら、最低3、4日は山歩きをして少々天気待ちしてもナンガバルバットなどの山を見ないと一寸片手落ちの旅行になるような気がする。

一 新聞記事からの冒険 ―

北極圏を犬ぞりで走行した植村直己へ昭和51年 度朝日体育賞(朝日新聞社 同紙本年1月4日付 朝刊)が贈られた。この賞の50年度受賞者の1人 には、発表記事の小見出しを「ヨット」とした小 林則子がいた。小林は太平洋横断を冒険といった ものではないと終始いいつづけてきたからこの扱 いは妥当なものであったろう。

今回の植村の場合、それは他の「レスリング」、「バレー」などと並んで「冒険」とされ受賞理由が説明されている。すなおにとれば冒険は体育の範囲にあることになるけれど、北極圏で活動した植村の報道記事は、同紙のスポーツ面(体育面にあらず)には登場せず社会面にそれも数回見ただけのように記憶している。

日本人の海外登山記事が社会面からスポーツ面へ移行してきたのはここ数年のことで、これと同様なことが冒険にもおこるという見通しは十分に立つ。しかし、同社の関連する朝日カルチャーセンターの昨年8月分で、探検・冒険講座(事前説明では実技なし)が「人間を考えるコース」中におかれ、また、植村は詩関係の歴程賞も受けるなどしている。

これら非スポーツ的取りあげ方は、現在の所、 適切なのだ。植村の行動が、体育賞にあげられた のは探検・冒険が世間に与える複雑感を上手に処 理した結果ともいえる。

そのような大記事に対して小記事の一例に札幌 地裁の判決がある。高校生が研修登山中に沼でイ カダ遊びをし水にとびこみ心臓マヒで死亡した。 1973年6月のことだ。生徒の両親は教師の監督 責任などを追及すべく訴えたが、判決(昨年2月 27日)は、教師の責任とイカダの管理責任につい て問題はないとし損害賠償請求を棄却した。

これを伝える翌28日付朝刊によると、判決文中に、イカダ遊びをしようとしたその男子生徒の冒険心に富む行為が原因だから他の責任は追及できにくいといった文章があるように記事を読めた。判決文にこういった言葉が使われるのはそうめったに無いと思い、じかに読みたかったが、判決文は一般人にはまず入手できないという。

この事件の詳細とその後については不明だが、裁判の争点が小中学生でなく高校生であっても、類似事件で教育管理者の賠償責任を裁判所が認める最近の傾向中、この判決は例外と思える。

平凡社の世界大百科年鑑 1976 年版に「登山」の項がある(p. 483 担当・田沢重之)。「探検・冒険」は小川 渉の担当(p. 437)。いずれも小文と年表構成、文はエッセンスばかりで鋭い。「出版」の項(p. 346)ではmookについてもふれている。

以上文章中、新聞は朝日新聞東京本社発行の第11版朝刊と同地域の夕刊をさす。

教育管理と生徒の自由度は新難題ではなかろうか。 「児童心理1976年7月号」は子供の冒険心を特集した (金子書房 東京都)。最高裁司法研修所で梅棹忠夫は 「人間と社会とアドベンチャー」という話をしている (月刊エコノミスト1974年8月号毎日新聞社)。(ひ)

第 1 章

国土

インドのジャム・カシミールのラダックは住居がまばらな国境地帯にあり、レー、カルギル、ザスカール地方を含んでいる。 4番目の地方、スカルドは、パキスタンの占領下にある。ラダックの259の村は113,960平方キロメートルの広さがあり、88,000の人が住んでいる。これらのうち40,000人はレー地方の67,340平方キロメートルにある110の村に住んでいる。ラダックに定住する人は、栽培可能な土地と仏教の僧院の近くに居をかまえている。

自然の特色

土地の自然の様子の中で最も著しい特色は、南東から北西へ平行に走る山脈である。西から東へ走っているヒマラヤ主脈にはザスカール、ラダック山脈、ムスターグ山脈、コンロン山脈がある。それらの山脈のむきが川のコースを決定している。標高は2,747 mから7,315 mの間で変化している。5,000 m以上の高度でしか住居を見かけることはない。大きな湖底が干上ったあとがあり、現在では雪がとける4、5月になると大きくなる2つの湖がある。東の方には湖からの小さな沢山の流れによって、多数の陸地でかこまれた湖がある。それらの湖は、サリー・シルガンガ湖をのぞいては、しおからい水である。

この地方にはいくつかの谷がある。それらの最も大きいのは、インダス谷で、谷の始めから終りまでのほとんどの部分が南東から北西へ走っている。小さい谷の多くの間に、ザスカール、ショークの村が開けている。

ゾジ・ラの南側シンド谷は、厚く森林におおわれている。しかし北方は、ほとんど同じ高度で、森林がない。草でおおわれた松林と、もみでおおわれた斜面は、突然、日中の太陽の激しい熱と、夜は急激な気温の降下によって凍るために枯れたり、風化した石や、裸の岩のさびしい丘になってしまう。気温の急激な降下で砕けた岩は、ラダッ

クを標高の高い砂漠の砂と岩の地にかえてしまう。 そのような極端な気候上の状態での森林は、特に雨の不足によって発達しない。その結果、燃料の不足と同じように材木も、不足している。ラダック人は勤勉な人だが、しかしながら、その要素に対して冷酷な戦いをおこなった。そしていくつかの木の種を、そだてるのに、成功した。ポプラやなぎ、ヒポピアが、順応したが、それらはゆっくり、育つものであった。ヒマラヤ杉とチークの木が、どこか他のところで重要であるのと同様ラダックでは、ポプラが重要である。ラダックの木は、ときどき何か神秘的なものにみられている。

気 候

ラダックの気候は、一般的に、日中は焼けるように暑く、夜は刺すような寒さである。雨量は、極度に乏しく、1年間に非常にわずかで、76.2mm (3インチ)である。極端な空気の乾燥によって、なんでも乾いてしまう。たびたび激しい降雪がある。この気候は、しかしながら、動物の生活には好都合である。標高5,182 mに野生の、ろば、かもしか、ヤク、野生やぎと野生のひつじの一種を、見つけ出すことができる。そして、5,182 mと5,792 mの間には、マーモットと野うさぎがいる。ラダックは、スポーツマンとハンターを引きつけるところである。それは、マークフォの巣と、赤くま、雪ひょう、チベットかもしか、ガゼルのすみかである。

ほとんどの部分が、荒れ果てた岩の多い所なので、近づきがたい地形は、信じることができないほど貧弱である。人はここでは、地平線を見ることができない。しかし山々は、5~6,000 mもそびえている。最も高い人間の住居のいくつかは、ラダックにみられるのである。2,743 mから3,657 mの間に村がある。人口密度は、世界中で最も低く、1平方マイルにつき、およそ2人である。

山の地形は実に人間に挑戦をしているようである。ここは凍った丘の、のこぎり状の脈の中央部であり、希薄な空気のため、数十歩登るだけでも、力とスタミナをたくわえておく努力が、要求

される。 ν -には、降雪はないが、寒さは北極圏 のそれに匹敵する。夜は0度以下の温度であり、(ダラスの夜の摂氏 -30から-40) すざましい風がうなる。

すべての物が、冬の間中凍ってしまう。インダス川の表面は凍ってしまいその上をジープで、ドライブすることができる。小さな小川と泉もまた凍ってしまう。人は氷のわれ目から、料理と飲料のための水をとり出す。野菜とくだものは、かたい石のようにかわる。そして平地にくらべて、このような高地では、料理するのに、大変時間がかかる。料理した食物を、皿の上に数分間おいたならば、それは、かたいかたまりになり、もはや食べることができない。

レーは、この地方の主都であり、美しい、古い世界の町で、高くそびえる山のふもとにある。斜面にある町は、16世紀にたてられた宮殿と修道院がある。

第 2 章

民 族

ラダックの人々は、少なくとも3つの明確な民族の混成である。これらの2つは、ギルギットのダートと北インドのマンスに代表されるアーリア人である。3番目は、他の2つよりすぐれているモンゴル系人である。それらの民族の統合により、ラダックの人々が、農業家と遊牧民のアーリア人とモンゴル人の混血によって、あらわされた時代に、大きく成長した。レー、ザスカールでは、人々は熱心な仏教徒であるが、彼らの中には、ちらほら回教徒もまざっている。カルギル地方に住んでいるのは、ほとんど、シーア信仰の回教徒である。

性 格

自然に近いこれらの生活をしている、ラダックの人々は、実用的な毎日の生活は大変に厳しい。彼らの3つの主な性格は、愉快、正直、そして、仕事を喜んでする気持である。気質上、彼らは平和を愛し、ラダックでは、殺人はない。小さな盗みがたまにおこるだけである。

ラダックの人々は、音楽を好み、男も女も、歌

を歌いながら、仕事に活気をつける。お祭りは、 歌なしでははじまらない。ダンスとドラマは、結 婚式の時も、また行なわれる。ポロとアーチェリ - が庶民的スポーツである。

強く、健康的で、勤勉な、代表的ラダック人は よく成長し、みんな背が高い。彼は突起したほほ の骨、小さなあごさき、黒目の細い目をしている。 鼻骨は、低く、顔の毛は、成長がとぼしい。

ラダックの読み書き能力は、チベット地方では 高いが、しかし一般に読み書き能力は高くない。 彼らの文学は、17世紀にデバナガリから、はいっ てきた。

主要食物は、あぶり、粉にして塩茶をかけて食べる大麦である。チャンは、大麦から醸造してつくられ、得意なのみものである。肉は、祝祭の時に出される。

経 済

農業はラダック人の主要なものである。大麦、きび、小麦、えんどう、なたねそして、かぶらは主要な作物である。あんずの木、くるみの木、くわの木そしてリンゴの木は低いところにそだつ。木は高さが低い。男、女、子供は野でいっしょに働く。家族のおのおののメンバーは、 それぞれ才能によって仕事を都合よくわける。

ヤクと牛の間のゾウは、普通土地を耕すために使われる。高地の遊牧民チェンバスは家畜を育てる。彼らはテントに住んでいて、彼らの長い髪のヤギと羊の牧場をさがしにあちらこちらに動きまわる。それらのヤギの羊毛から有名なカシミールショールができる。羊毛はラダックの商業生産品の主要なものである。

ラダック人の生活は苦闘の連続である。 彼らは しかしながら平和と正直な村の人々に満足してい る。

習慣

一妻多夫は一夫一婦の結婚に変わりつつある。 大きな修道院の独身者のラマ僧の儀式と、一妻多 夫の慣習は、人口の増加につれて限定された。ラ ダック人の結婚の習慣は多くのおもしろい特色が ある。たとえば新郎は、新婦のところへ行かない。

■■■ラダック・トレッキング "世界の屋根を行く "**■■■■**

52年8月4日発、18日間、(費用)45万円、(添乗員)前半有、(メ切)4月28日、(定員)各コース共10名。(デリー往復または、スリナガルまでの往復の航空機のみご利用希望の方はご相談下さい)

第1日目 東京→デリー(航空機) 第2日目 デリー→スリナガル(航空機または車)

第3~4日目 スリナガル→レー(特別許可が得られればデリーからバララチャ峠経由レーへ)

第5~13日目 * A コース (チベット文化) レーを中心としたチベット文化をさぐる パーティ、 ジープでヘミス、アルチなどのゴンパを訪ねたり、チベット人、ラダック人との交流。

*Bコース (サセル・カンリ偵察) カルドン・ラを越えてヌブラ谷に入る。サセル・カンリの偵察を含む。このコースは特別許可が必要。不許可の場合はCコースに合流。

*Cコース (ザスカール登山) レーの南にあるザスカールの 5,000m級の知られざる山に登る。積雪期登山経験必要。52年5月の連体に打合せをかねた山行合宿の予定。

第14日目 予備日(予定通りに終った場合はスリナガル周辺の観光に予備日をあてます)

第15~18日目 往路と同じコースで帰国

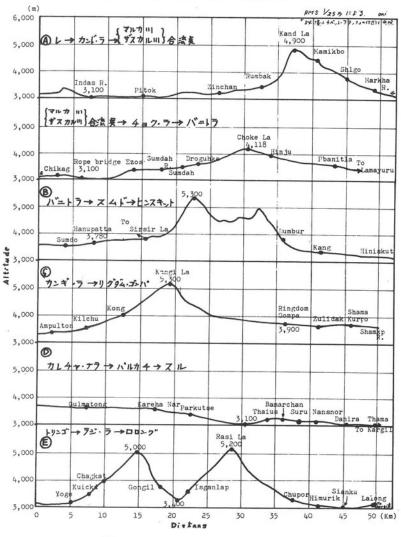
(費用・日程とも現地の事情で変更することがあります)

ラダック、ザスカール の秘められたコース

◇レーを起点として南の方にむかうとカンド・ラの峠を越えて、ザスカール川に出、そこからチョク・ラを越えて、ラマ教のゴンパが岩と砂の中に立ち並んでいるラマユルの村へ出る。

10日間みておけば大丈夫 であろう。ただし、ラマユ ルからの車はあらかじめチャーターしておく必要があ ろう。 **②**のコース。

サンスカール東部主要ルート高距表



∞∞ AIUのトレッキング用海外旅行保険 ∞∞∞

この保険は、トレッキングをふくむ旅行期間中のケガや病気による医療費、死亡金をお支払いいたします。ただし、ザイル、ピッケル、アイゼンなどを使用する登山行動中の事故はカバーいたしません。保険料はタイプおよび期間で決ります。3タイプのうち1タイプをお選び下さい。申込書の「旅行目的」の欄に「Trekking」とタイプ名(A、B、C)をお書き下さい。申込書はHAJ名古屋事務所にありますので、出発前1カ月以前にお問合せ下さい。

		Bタイプ	Cタイプ
	死亡・後遺障害		
	疾病治療実費	250万円	
病			

なお、保険期間の数え方としては、初日は算入しません。たとえば 11月10日から11月24日までの旅行ですと、保険期間は14日間。また 普通の観光などを目的とした海外旅行のための保険も扱っています。 保険料は上記の約1/3 になっています。

保険料金			
	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ
8日~10日間迄	12,150円	18,910円	30,760円
11日~14日間迄	12,650円	19,610円	31,760円
15日~17日間迄	12,960円		
18日~21日間迄		20,820円	
22日~24日間迄	13.920円	21,330円	34,180円
25日~27日間迄	14,490円	22,160円	35,410円
28日~1カ月間迄	14.740円	22,510円	35,910円

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

ツアー名

- ★シルクロード 6,000キロ
- ★ネパールとアフガニスタン。
- ★砂漠の国アフガニスタンと最 後の桃源境フンザ
- ★大ペルシャとアフガニスタン

一お問い合わせは下記まで―― 一般登録 372号

(株)トラベル ジャパン

〒100 東京都千代田区有楽町2-2-1 ラクチョウビル5 〒 電話 (03) 572-1461 担 当 外池・小島・丹羽

海外登山、トレッキングに傷害保険を

海外旅行傷害保険(運動危険担保特約付)について研究しております。

岳 産業にご相談して下さい!

すべての保険を取扱い安心と笑顔を売る岳産業の西田までご連絡下さい

口動車・火災・レジャー(山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット)・普通傷害・利益 ・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。

できているなど、 なりました。観光客のほどんどをい 現代の「跳線域」とはここのことです。 たする中心に世移の風状態であった たする中心に世移の風状態であった をリソコート。 観光客のほどんどをい なるでしまう。 なるでしまう。 なるでしまう。 なるでしまう。 なるでしまう。 なるでしまう。 なるでしまう。 なるでしまう。 のかせください。 なるでしまう。 のかや学でしまう。 のかを中にあるカリン ファイトの関系によるは、デリーの出来的 が必要ですれるといでもあり、 ファイトの関係流行くによるとと、ナリーの出来的 のと、ナリーのでは、デリーの出来的 のと、ナリーので、カファインディるとし、カラー、カファインディーのが必要です。 は、デリーのが必要です。 は、デリーのが必要です。 は、デリーの出来的 ののなが必要です。 は、デリーのはない。 は、デリーのはない。 は、デリーのはない。 は、デリーのよりのはない。 は、デリーの出来的 ののはから外間人に解なされるとンズー教 になるによるとと、カラー、 は、デリーのよりのはない。 は、デリーのよりのはない。 は、デリーのよりのはない。 は、デリーのよう。 ののはない。 は、デリーの出来的 になり、





がルワール・ラダック、そしてカシミールへと三千キロ。 オ・。雄大な八千メートル級の巨峰の連なるピマラヤを自分 イルドなトレッキングは、どのレジャーも及ばないスケー でいるケー

ルの大きさと心の安らぎを実に、ヨーロッパ・アルブ東に、ヨーロッパ・アルブ

世界の35都市をネットする

東京・千代田区有楽町日比谷バークビル〒100年214-7631 大阪・東区備後町松豊ビル〒541年264-1781 名古屋・中村区堀内町ホテルニューナゴヤ〒450年583-0747 港戸・革合区布引2-1-3 新布引ビル〒651年(078)222-1919 福岡・博多区博多駅前 八重州博多駅前ビル 2002-471-7172